

第二章 光源氏の物語 六条院の女方を見舞う物語

[第一段 源氏、中宮を見舞う]

南の御殿には(中將は中宮のお見舞いから戻ると、春の町の南の寝殿では)、御格子参りわたし(格子蔀が女房たちがすっかり開け上げ申してあったので)、*昨夜(よべ、昨夜の様子からすると)、*見捨てがたかりし花どもの(見捨て難かった花々が)、行方も知らぬやうにてしをれ伏したるを、見たまひけり(見る影もなく萎れて倒れているのを紫の上は御覧になったに違いない、と思いなさったのです)。*「昨夜」とは「暮れ行くままに」と中將が訪れた南の御殿で垣間見た紫の上の回想を示す。*「見捨て難かりし花ども」とは、「昨夜」中將が垣間見た上の心象である「花どもを心苦しがりて、え見捨てて入りたまはず」のことであり、即ち当文は中將の心象文である事を意味し、「見たまひけり」は上の行動を中將が「昨夜」の心象に基づいて慮った<御覧になったに違いない>という言い方となる。しかも、「しをれ伏したるを」で読点を振れば、上の傷心までを余韻を残して表現した上で、それを氣遣う中將の「見たまひけり(思いなさったのです)」という文にもなる、という助動詞「けり」の伝聞と強調の語用を技巧的に使い分けた重ね文で、そんな風に見えるうちは洒落た文に思えても、こうして理屈を立てると随分面倒臭い。

中將、*御階にみたまひて(階隠しの簀子に座しなさって)、御返り聞こえたまふ(中宮のお返事を殿に申し上げなさいます)。*「みはし」は<宮中・神社などの階段を尊んでいう語。特に紫宸殿(ししんでん)の南階段。>と大辞泉にある。が、「居たまふ」は<座していच्छる>だから、階段途中は考え難く、階段の上か下だろう。階段下は「中の廊の戸」が庭に続いていたら、庭を通過して寝殿に帰って来たことになり、それはそれで面白い意味にはなるが、殿は恐らく階段上の南正面廂にいच्छるのだろうから、階段下では話が遠すぎる。いや、仮に殿が簀子に出ていたとしても、階段下との話は大声でしなければならず、中將としても中宮のお返事を申し上げる場として階段下は憚られるだろう。やはり、階段上の縁側簀子が妥当だ。尤も、縁側とは言っても南正面階段の上には階隠(はしがくし)という屋根、とは庇が設けられているので濡れ縁ではない。で、正に其処を「御階」と言っている、と考えて置く。ところで、この寝殿は東の間を紫の上が、西の間を明石姫が使っている、との事だったと思うが、南正面の階段上が当然に殿の御座だったとすれば、母屋五間廂七間の幅配分は東西でそれぞれ3対2、4対3だったようだ。だとすると、昨日中將が東南の妻戸から見越したであろう「西の御方より、内の御障子引き開けて渡りたまふ」という殿の動線は、この廂の間に西側から出てきた、と考えて良いのだろうか。本当に分からない事だらけだ。

「荒き風をも防がせたまふべくやと(強風でも殿がお防ぎ下さるだろうと)、若々しく心細くおぼえはべるを(幼子のように心細くしておりましたが)、今なむ慰みはべりぬる(この中將君のお見舞いで慰められました)」

と聞こえたまへれば(と申しなさると)、

「あやしく*あえかにおはする宮なり(いつになく弱気でいच्छる宮だな)。女どちは(女同士では)、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば(とても恐ろしく思えてならない昨夜の強風具合だったので)、げに(確かに、すぐ駆けつけなかったのは)、*おろかなりとも思いつらむ(薄情ともお思いになったのだろう)」 *「あえか」は<か弱くはかないさま>。古語辞典には、動詞「落ゆ(あ

ゆ、落ちこぼれる・したたる・劣化する)」の連用形に状態の接尾語「か」が付いたもの、と説明されている。 *「おろか」はくおろそか、薄情、劣る、不十分だ>。「思いつらむ」は「おぼしつらむ」の音便で「おぼいつらん」。

とて(と殿は中宮の御前に)、やがて参りたまふ(すぐに伺いなさいます)。御直衣などたてまつるとて(略儀ながら礼装で中宮にお目に掛かる身支度を申し上げようと)、御簾引き上げて入りたまふに(殿が御簾を引き上げて母屋にお入りなさる時に)、「短き御几帳引き寄せて(小型の仕切り几帳を引き寄せて)、はつかに見ゆる御袖口は(わずかに見えた御袖口は)、さにこそはあらめ(あの方に違いない)」と思ふに(と思うと)、胸つぶつぶと鳴る心地するも(胸がときめいてしまうのが)、うたてあれば(困るので)、他ざまに見やりつ(中将は目を逸らしていました)。

殿、御鏡など見たまひて(鏡で身繕いなさりながら)、忍びて(小声で上に)、

「中将の朝けの姿は(中将の今朝の姿は)、きよげなりな(綺麗だよな)。ただ今は(まだ今は)、きびはなるべきほどを(子供っぽい年頃だが)、*かたくなしからず見ゆるも(見苦しからず見えるのも)、*心の闇にや(親の鼻屑目だろうか)」 *「かたくなし」は「頑し」と表記されく頑なな様→偏屈だ、気が利かない、見苦しく劣っている>と古語辞典にある。 *「こころのやみ」はく心の迷い>で、親の鼻屑目で子供の客観的評価をく見誤る>という意味で良く使われる言い方らしい。

とて、わが御顔は(ご自分のお顔は)、古りがたくよしと見たまふべかめり(老け込まずに美しいとお思いのようです)。いといたう心懸想したまひて(随分と念入りに身支度なさって)、

「宮に見えたてまつるは(宮に御目に掛かるのは)、恥づかしうこそあれ(気が引き締まります)。何ばかりあらはなるゆゑゆゑしさも(特に表立って格式ばったところも)、見えたまはぬ人のお見せにならない方だが)、奥ゆかしく心づかひせられたまふぞかし(物事を深くお考えなされる方のようです)。いとおほどかに女しきものから(とてもゆったりと女らしい物腰でいらっしゃいますが)、*けしきづきてぞおはするや(御自分のお考えはお持ちですので)」 *「けしきづく」はく表情を見せる→考えを言う→意思がある>くらいだろうか。

とて、出でたまふに(母屋から出ていらっしゃると)、中将ながめ入りて(中将は考え事でもあるのか目を逸らしたままで)、とみにもおどろくまじきけしきにてゐたまへるを(すぐには気付かない様子でいらっしゃったので)、心疾き人の御目にはいかが見たまひけむ(察しの良い殿のお目にはどう映ったものか)、立ちかへり(母屋へ戻って)、女君に、

「昨日、風の紛れに(嵐の騒ぎに紛れて)、中将は見たてまつりやしてけむ(中将は貴方を見掛け申したのかも知れないな)。かの戸の開きたりしによ(その妻戸が開いていたしな)」

とのたまへば(と仰ると)、面うち赤みて(夫人は顔を赤らめて)、

「いかでか(まさか)、さはあらむ(それはないでしょう)。渡殿の方には、人の音もせざりしものを(人の物音もしませんでしたものを)」

と聞こえたまふ(と答えなさいます)。

「なほ(いや)、あやし(どうかな)」とひとりごちて(と殿は独り言を仰って)、渡りたまひぬ(中宮の御殿に渡りなさいました)。

御簾の内に入りたまひぬれば(殿が中宮の寝殿の御簾の中に入ってしまいなされたので)、中将(付き添った中将は)、*渡殿の戸口に人びとのけはひするに寄りて(北東妻戸に女房たちが居る気配がするので近付いて)、ものなど言ひ戯るれど(冗談を言ったりするが)、思ふことの*筋々嘆かしくて(何かにつけて紫の上が思い出されて)、例よりもしめりてゐたまへり(いつもよりしんみりしていらっしやいました)。*「わたどののとぐち」とは何処なのか。殿と中将は秋の町の東の対の南面を通って寝殿に来たに違いない。となると、女房たちは室内の側近以外は遠慮して姿を隠し、遠巻きに会談の様子を窺うのだろう。となると、この「渡殿」は南廊下ではなく北廊下であり、従って「戸口」は寝殿の北東妻戸なのだろう。中将は此処の女房たちと親しいようだから、身軽に動けたかとも思う。*「すぢすぢ」はくいちいちすべて。「嘆かし」は中将が「いと似げなきことなりけり」と考えざるを得ない紫の上への興味が、抑え難く起きて来てしまう事、を指しているのだろう。

[第二段 源氏、明石御方を見舞う]

こなたより(中宮の御殿から)、やがて北に*通りて(殿はそのまま北へ管理区の境を越えて行き)、明石の御方を見やりたまへば(明石の御方の台風の影響を見渡しなされると)、はかばかしき家司だつ人なども見えず(しっかりした家財管理人なども居ないように)、馴れたる下仕ひどもぞ(いつもの下働きどもだけが)、草の中にまじりて歩く(草を分け入って庭の片付けに歩き回っていました)。*「とほる」はく境を抜ける、別の地点に繋がる・届く・通じる道を進む>という語感。西区画から北区画へ直接繋がった廊下が在った、という意味に見える。

童女など、をかしき相姿うちとけて(可愛い普段着で打ち解けて)、心とどめ取り分き植ゑたまふ(御方様がお気に入りです特に分けて植えていらした)龍胆(りんどう)、朝顔のはひまじれる(朝顔の茎や蔓が地面に低く這い交じっている)籬も(ませも、花壇の編み囲いの竹も)、みな散り乱れたるを(みな嵐で散り乱れているのを)、とかく引き出で尋ぬるなるべし(それぞれ引き出して元の姿を訪ねるように直しているようです)。

もののあはれにおぼえけるままに(物寂しさを覚えるままに)、箏の琴を掻きまさぐりつつ(御方は十三弦琴を手慰みながら)、端近うゐたまへるに(庭先近くの廂に出ているが)、御前駆迫ふ声(おんさきおふこゑ、殿のお成りを知らせる先導の声)のしければ(がしたので)、うちとけ萎えばめる姿に(着慣れた柔らかい服の姿の上に)、小桂*ひき落として(礼装上着を羽織って身分相応にへりくだって)、けぢめ見せたる(自覚を示したのは)、いといたし(とても健気です)。*「引き落とす」の「引く」はく相当な例示を探す>でありく分相応に>を意味し、「落とす」はく引き下がる>で通せばく分相応に謙る>。と同時に、訳文にあるようにく(小桂を)衣桁から引き下ろしてはおって>いたこととを複意させた文なのだろう。

端の方につゐたまひて(しかし殿は、座敷の端にちょっと座って)、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて(嵐のお見舞いだけを仰って)、つれなく立ち帰りたまふ(形ばかりのご挨拶だけですぐお帰りなさいます)、心やましげなり(御方は心寂しそうです)。

「おほかたに萩の葉過ぐる風の音も、憂き身ひとつにしむ心地して」(和歌 28-01)

「ただ通り過ぎる萩の風、それが悲しい恋心」(意識 28-01)

*注にはく明石御方の独詠歌。「いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋と告げつる風のわびしさ」(後撰集秋上、二二〇、読人しらず)。>とある。「おほかたに」の<普通に、ごく当たり前に>という意味と<通り一遍に、おざなりに>という意味を複意で込めた歌なのだろう。

とひとりごちけり(と独詠しました)。

[第三段 源氏、玉鬘を見舞う]

西の対には(西の対にあつては)、恐ろしと思ひ明かしたまひける(野分を恐ろしいと思ひ夜明かしなされた)、名残に(余波で)、寝過ぐして(朝遅くまで寝過ぐして)、今ぞ鏡なども見たまひける(今になって鏡を見て身繕いなどをなさっています)。

「ことごとしく(改まって)前駆(さき、前触れの声などを立てて)、な追ひそ(先払いなどはするな)」とのたまへば(と仰って)、ことに音せで入りたまふ(殿はわざと音を立てないように姫の部屋に入りなさいませ)。

屏風なども皆畳み寄せ、ものしどけなくしなしたるに(まだ片付いていない雑然とした部屋に)、日のはなやかにさし出でたるほど(日差しが明るく差し込むと)、けざけざと(鮮やかに)、ものきよげなるさましてゐたまへり(姫はそれは美しい姿で座っていらっしゃいました)。近くみたまひて(殿は近くにお座りになって)、例の(いつものように)、風につけても*同じ筋に(強風のお見舞いだというのに相変わらずの手を取ってのいたわりで)、むつかしう聞こえ*戯れたまへば(過剰な優しさで煩わしく言い寄って抱き寄せなされるので)、堪へずうたてと思ひて(姫は堪らずに嫌悪を覚えて)、 *「同じ筋」は曖昧な言い方で、口説きから親代わりの世話までの幅がある殿の言動のどの辺りの「例」なのか分からない。というか、曖昧にした事で口説きの部類なのは察しが付くが、それでも内大臣の今姫出現以来の最近は自制が強く掛かって来ているような経緯なので、具体的な殿の言動は分かり難いが、姫が「たへずうたてとおもひて」と成るような事を考えてみた。 *「たはぶる」は「むつかしう(煩わしく)」とあるのでく冗談を言う>ではなくく(しつこく)じゃれる→絡む→言い寄る>だろう。

「かう*心憂ければこそ(このように頼りない身なのでいっそ)、*今宵の風にも(昨夜の嵐にでも)あくがれなまほしくはべりつれ(吹かれて行ったら良かったかなという気がします)」 *「こころうし」は<情けない、不愉快だ>とあるが、「うたてと思ひて」と嫌悪感は既述されているので、発言の趣きとしては<情けない←頼りない←風に舞う>くらい嵐のひどさに掛けた言い方になっていなければ洒落ていないし、「厭だ」では無礼が過ぎる。 *「こよひ」は現代語では<今夜、今晚>だが、古語では<今日の夜>ではなく<今の夜>ということらしく、夜明けになっての「今宵」は<昨夜、昨晚>を言うらしい。

と、むつかりたまへば(不機嫌そうになさると)、いとよくうち笑ひたまひて(殿はとてもおもしろそうにお笑いなさって)、

「風につきてあくがれたまはむや(風邪の向くままにさ迷いなさるとは)、軽々しからむ(余りにも奔放で家柄由緒をわきまえない為さり様でしょう)。さりとも(そうは言っても)、止まる方ありなむかし(落ち着き先は決まっているようですね)。やうやうかかる御心むけこそ添ひにけれ(次第にそうしたご意向といったものが強まっているようですね)。ことわりや(その表れなんでしょうね)」

とのたまへば(と仰ると)、

「げに(確かに)、うち思ひのままに聞こえてけるかな(つい思った通りの事を申し上げてしまったものだ)」

と思して(とお気付きになって)、みづからもうち笑みたまへる(ご自分でもお笑いなさる)、いとをかしき色あひ(とても美しい姫の表情と)、つらつきなり(顔立ちなのでした)。

酸漿(ほほづき、ホオズキ)などいふめるやうにふくらかにて(などに例えられるほどふっくらとした頬で)、髪のかかれる隙々(ひまひま、間から見える顔立ちは)うつくしうおぼゆ(可愛らしい感じですが)。まみのあまり*わららかなるぞ(目元があまり朗らかなのが)、いとしも品高く見えざりける(必ずしも上品には見えなかったが、)。その他は、つゆ難つくべうもあらず(少しも欠点の付けようもありません)。*「わららか」は<陽気なさま、にこやかだ>と古語辞典にある。

[第四段 夕霧、源氏と玉鬘を垣間見る]

中将(中将は殿が姫に)、いとこまやかに聞こえたまふを(たいそう親しげにお話いなさるので、「いかでこの御容貌見てしがな(何とかして姫の御顔立ちを見てみたいものだ)」と思ひわたる心にて(と思いつけていた気持ちも在って)、隅の間の御簾の(母屋の角部屋の御簾が)、几帳は添ひながらしどけなきを(前に几帳はあるものの隙間がゆるく開いていたので)、やをら引き上げて見るに(そっと引き上げて中を覗き見ると)、紛るるものどもも取りやりたれば(嵐で備品が取り払われていたので)、いとよく見ゆ(御二人の様子がとてもよく見えます)。かく戯れたまふけしきのしるきを(このように寄り添って睦まじい御二人の姿がはっきり分かって)、

「あやしのおわざや(妙な具合だぞ)。親子と聞こえながら(親子とは申せ)、かく懐離れず(こうも懐に深く)、もの近かべきほどかは(近く抱き寄せるべき年少者でもないのに)」

と目とまりぬ(と中将は目を止めました)。「見やつけたまはむ(こうしては、殿が私を見つけないさるかも知れない)」と恐ろしけれど(と恐ろしかったが)、あやしきに(異常な光景に)、心もおどろきて(興味を駆られて)、なほ見れば(さらに見れば)、柱隠れにすこしそばみたまへりつるを(柱の陰へ少し体をそむけていらした姫を)、引き寄せたまへるに(殿が引き寄せなさると)、御髪のみ寄りて(姫の髪が一旦まとまってから)、はらはらとこぼれかかりたるほど(はらはらと顔に掛かる時に)、女も(姫は女の表情で)、いとむつかしく苦しと思ふたまへるけしきながら(とても困った様子ながら)、さすがにいとごやかなるさまして(それでも物慣れた物腰で)、寄りかかりたまへるは(殿に寄り掛かりなさるのを)、

「*ことと馴れ馴れしきにこそあめれ(すっかり馴れ馴れしい仲に成っているようだ)。いで(いやこれは)、あなうたて(何とも驚いた)。いかなることにかあらむ(どういうことなのだろう)。思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて(殿は良い女を見逃しなさらぬ御性分なので)、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは(小さい時から見慣れて育てなさらなかった姫には)、かかる御思ひ添ひたまへるなめり(こうした好意も加えてお持ちなさるようだ)。むべなり*けりや(姫の美しさからすれば無理も無い男心なのだろうか)。あな(しかし父娘であってみれば)、疎まし(気持悪い)」*「ことと〜にこそ」は<すっかり〜ことに>。 *「けりや」は<〜ということだろうか>という、他者の価値観に対する反語ないし疑問。

と思ふ心も*恥づかし(と考えるだけでも中将は気恥ずかしく居心地が悪いのです)。 *「はづかし」は<きまりが悪い、気が引ける>だが、殿が優れているからでも自分が劣って居るからでもなく、家族の人間関係として受け入れ難い、という居心地の悪さなのだろう。見てはいけないものを見てしまった落ち着かない気分で、場違いな恥づかしさ、ということなら現代語に近い語用かも知れない。「さうざうし」に近いような気もするが、「恥づかし」には女語りの感触がある。

「女の御さま(姫を女として見た御姿は)、げに(確かに)、はらからといふとも(姉弟と言っても)、すこし立ち退きて(少し縁遠くて)、異腹ぞかし(腹違いではある)」など思はむは(などと考えると)、「などか(姫は決して)、*心あやまりもせざらむ(恋愛対象にならない不美人ではない)」とおぼゆ(と思えるのです)。 *「こころあやまり」は<心得違い>で<姉への恋慕>を意味するのだろう。腹違いでも、父親が同じならさすがに少なくとも表向きは恋愛や性愛や婚姻関係の対象では無い。ただ、従姉弟婚や従兄妹婚などは当たり前で、むしろ相応しい相手くらいだったようだし、源氏殿と葵上も桐壺帝の妹宮が大宮なので従姉弟婚だし、今でも有り得る関係だ。尤も、対の姫と中将は実は姉弟ではないのだが。

昨日見し御けはひには(昨日見た紫の上の御様子には)、け劣りたれど(気持ち劣るものの)、見るに笑まるるさまは(見るに好ましく嬉しく笑んでしまうところは)、立ちも並びぬべく見ゆる(並び立つ素晴らしさに思えます)。

*八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露のかかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる。 *「やへやまぶき」は黄色いバラだ。一重の山吹は近くにも植えられているのを目にしたが、可憐な小さい花という印象で藤原姫とは結び付かないが、八重山吹なら大きさはともかく派手な印象が藤原姫と良く似合いそうだ。今で言う4月の花だから、当時なら晩春か初夏の花で「やまぶきがさね」は春の色。

折にあはぬよそへどもなれど(山吹は春の花なので八月の仲秋には季節外れの例えだが)、なほ(やはり)、うちおぼゆるやうよ(姫はそういう印象でした)。花は限りこそあれ(花の命は短くて)、*そそけたる*しべなどもまじるかし(しおれた花びらを見せるものもあるが)、人の御容貌のよきは(姫の御姿の美しさは)、たとへむ方なきものなりけり(例えようも無いものです)。 *「そそく」は<乱れほつれる>と古語辞典にある。 *「しべ」は雄シベ雌シベのシベ、らしい。ところが、八重山吹は一重山吹の雄シベが花卉化し雌シベが退化した品種、と「花便り」Webサイトのページに説明があり、だから実を付けないとある。ということは、「そそけたるしべ」は<萎れた花びら>なのだろう。

御前に人も出で来ず(お側に女房たちも出て来ず)、いとこまやかにうちささめき語らひ聞こえたまふに(殿は姫にたいそう親密に小声で語らい申しなさっていらしたが)、いかがあらむ(どうかしたのだろうか)、まめだちてぞ立ちたまふ(真面目な顔つきで立ち上がりなさいます)。

女君、

「吹き乱る風のけしきに女郎花、しをれしぬべき心地こそすれ」(和歌 28-02)

「意地を張っても女では、固い誓いを守れない」(意識 28-02)

*「女郎花(をみなへし)」は<秋の七草の一つ。秋、黄色の花が咲く。>と古語辞典にある。どこかのページにカリフラワーみたいとあったが、確かにそんな印象の花の付き方だ。対の姫は、あくまでも黄色らしい。また、女が「女郎花」と詠めば、自分のことを示すのだろう。「をみな」は<女>のこととあり、「へし」を動詞として見れば<経し→経験したので→知ったので→辛い思いをしたので>みたいな含意になるのだろうか。「しをれ・し・ぬ」は<萎れてしまう>。「萎れる」という語感は<しっかりしていたものが力尽きる>という感じで<誇りを失う、自信を無くす>という諦観だろうか。嵐で女郎花が枯れてしまいそう、という歌筋に、姫は失意を詠んだのかも知れない。

詳しくも聞こえぬに(はっきりとは聞こえないが)、うち誦じたまふをほの聞くに(殿が詠唱なざるのを聞き取れば)、憎きものをかしければ(父娘の相聞などおぞましいものの興味は在ったので)、なほ見果てまほしけれど(そのまま最後まで見届けたかったが)、「近かりけりと見えたてまつらじ(近くに居たことを見つけ頂いてはならない)」と思ひて(と中将は思って)、立ち去りぬ(その場を立ち去りました)。

御返り(殿の御返歌は)、

「下露になびかましかば女郎花、荒き風にはしをれざらまし (和歌 28-03)

「何を弱気にをみなへし、いつに変わらぬ雨上がり (意識 28-03)

*「下露(したつゆ)」は<下草に結んだ露。また、木の葉などから滴り落ちる露。>と大辞林にある。雨に濡れた葉の上露(うはつゆ)は晴れば乾くが、下露は地面の水分でいつも濡れている。「なびく」は<従う、同意する、心を許す>だから、「日頃の暮らしを信じていれば、一時の迷いに絶望することは無い」みたいな歌筋が見えてくる。気弱になって嵐に負けるな、などと言ってしまうと情緒が無いが、実際に嵐の翌日であれば実感はある言葉なのだろう。その少なからぬ恩着せがましさは中年男の悲哀だろうか。

なよ竹を見たまへかし(なよ竹を見て御覧なさいな)」

など(などという相聞歌のやりとりは)、*ひが耳にやありけむ(盗み聞きした中将の聞き間違えかも知れないが)、*聞きよくもあらずぞ(父娘であれば外聞も悪いし、中将は気分も悪くしたことでしょう)。*「僻耳(ひがみみ)」は<聞きまちがえること。聞きそこない。転じて、思いすごし。>と大辞泉にある。「や」は反語の係助詞。*「聞き良し」は<耳に心地良い>または<外聞が良い>とあり、その複意での語用なのだろう。

[第五段 源氏、花散里を見舞う]

東の御方へ(東の御部屋様には)、これよりぞ渡りたまふ(この次にご訪問なさいます)。今朝の*朝寒なる*うちとけわざにや(今朝の急な冷え込みに思い立ってのことか)、もの裁ちなどする(冬物の仕立てや繕いなどの針仕事を)ねび御達(ねびごたち、古参の女房たちが)、御前にあまたして(夫人の側に多く居て)、*細櫃めくものに(細長い衣装箱のようなものに)、綿引きかけてまさぐる若人どもあり(真綿を引っ掛けて伸ばしている若女房たちも居ました)。*「あさざむ」は<朝の冷え込み>だろうが、「今朝の」と朝が被る言い方からは<俄かの、急な>という語感がある。*「うちとけわざ」の一般的な意味は<親しげな態度>かと思うが、此处では「もの裁ち」の縁語として「解く」を洒落て持ち出した言い方で、「打ち」は<場当たり感>を示し、「解く」は<分かる、気付く>の意で、「わざ」は如何にもわざとらしい芝居がかった言い回しの<急に思い立った行動>をこう言っているのだろう。*「ほそびつ」は「唐櫃(からびつ、足の付いた荷物箱)」の一つで、細長い衣装箱なのだろう。

いときよらなる*朽葉の羅(とても美しい朽葉色の網目織りの生地や)、今様色の二なく*擣ちたるなど(流行色の艶出しした生地などが)、引き散らしたまへり(部屋に広がっていました)。*「くちば」は<赤味を帯びた黄色>とある。「羅」は「うすもの」と読みがあり、網目織りの透けた生地、とのこと。*「擣ちたる(うちたる、打ちたる)」は<叩いて艶出しした生地>で「砧、きぬた」のことなのだろう。

「中将の*下襲か。御前の壺前裁の宴も(おまへのつぼせんざいのえんも、御所の中庭での秋の宴会も)止まりぬらむかし(今年は中止になるかも知れないな)。かく吹き散らしてむには(こうも嵐が吹き荒れては)、何事かせられむ(庭の景色も愛でるところではないだろう)。すさまじかるべき秋なめり(興醒めの秋になったようだ)」*「下襲(したがさね)」は束帯での礼装の際に後に長く引く飾り布、とのこと。

などのたまひて(などと殿は仰って)、何にかあらむ(何にするのか)、さまざまなるものの色ども(いろいろな色の生地があつて)、いときよらなれば(とても綺麗なので)、「かやうなる方は(こうした方面の東の御方の見立ては)、南の上にも劣らずかし(南の本妻にも劣らないようだ)」と思す(とお思いになります)。御直衣(おんなほし、殿の普段着に)、花文綾を(けもんれうを、花柄の綾織り地を)、このころ摘み出だしたる花して(この秋に摘んで出した花の染料で)、はかなく染め出でたまへる(薄く染付けなされたものは)、いとあらまほしき色したり(実に望ましい色合いでした)。

「中将にこそ、かやうにては着せたまはめ(こうしたものをお着せなさいませ)。若き人にてめやすかめり(若い人の直衣として似合うことでしょう)」

などやうのことを聞こえたまひて(などといったことを申し置きなされて)、渡りたまひぬ(殿は南の御殿にお帰りなさいました)。